論文　Original Paper

偉大なる自然景観に抱かれる
——神託の地デルフィ

伊　藤　哲　夫

Synopsis: In discussing about the planning and its background of the ancient sanctuary to Apollo, Delphi (wellknown as the place of oracle. 10 B.C.–) we pointed out the following; (a) a great landscape had special meaning for the existence of ancient Greek, so especially by determining their new city to live in. (b) and the fact that the sacred area was planned with a clear aspect: the sacred area itself, the sacred way and the standingpoint of the Apollo Temple were determined in wellconsidering of relation to its surrounding landscape.

要　旨：本論はギリシャ，コリント湾に臨み，パルナッソス山麓にある古代ギリシャの遺構，神託の地として名高い「デルフィのアポロンの神殿を中心とする神域」（紀元前10世紀（？）～紀元後４世紀）の生成過程・計画の背景について，景観との関連において考察したものである。主なる点として(A)：古代ギリシャ人は都市を建設するにあたって，偉大なる景観に執着し，その中に抱かれるように生きようとした。デルフィもその顕著なものであることを指摘した。(B)多数の奉納品・奉納庫が並び一見乱雑な印象を与える神域において，「聖なる道」のありよう，そこから背後の屏風のように立つ岸壁と関連してアポロンの神殿の見え方等を考察し，神域そのものの位置設定，「聖なる道」やアポロンの神殿の建立位置の選定における古代ギリシャ人の明確な計画意図があることを指摘した。

冬のある日，再びデルフィを訪れた。今度はオリンピアを車で出発して，パトラへと至り，そこで車をフェリーに乗せて対岸の町ナフパクトスに渡り，そこからデルフィを目指すのである。ナフパクトスはレパントの名で知られた港町で，この近くの海域で無敵であったオスマン・トルコ軍が，ヴェネツィア，スペインそれに法王庁を中心とする神聖同盟連合艦隊に敗れた有名な「レパントの海戦（1571）」があったところである。波を切って進む船からの対岸の眺めがすばらしい。左手，紺碧の海から大きな山々が立ち上がっている。岩山が絶壁状に海に突き刺さる厳しい景観はさほどめずらしいものではないが，ここでは大きなたおやかな山々が幾重にも円弧を描きながら海から直接立ち上がる様は悠々として雄大だ。

こうしてナフパクトスに着きそこから海岸線を走って着いたデルフィの外港キラ（今日のイテア）はコリント湾の内奥に位置する今は海浜の別荘地としても知られる港町だ。そしてこの港町に迫るように聳えたつ山を一気にのぼる。聳え立つといっても，険しい岩山ではなく，銀緑色にその葉を風になびかせるオリーブの樹林に覆われたたおやかな山で，冬には雪を頂く雄大なパルナッソス山に連なる。高低差の大きいこの山を一気にのぼるのだが，空気はますます透明に澄み切ってくる。眼下にひろがるオリーブの樹海の向こうには，光る海がみえる。

こうして港町キラから距離にして10 km 程だろうか，車でも20分はかかるパルナッソス山麓の高地に位置するデルフィに到達する。海抜550 m はある高地だ。古代ギリシャ人がいかに健脚であったとしてもゆうに数時間はかかる，港からそう簡単には行けない高地である。

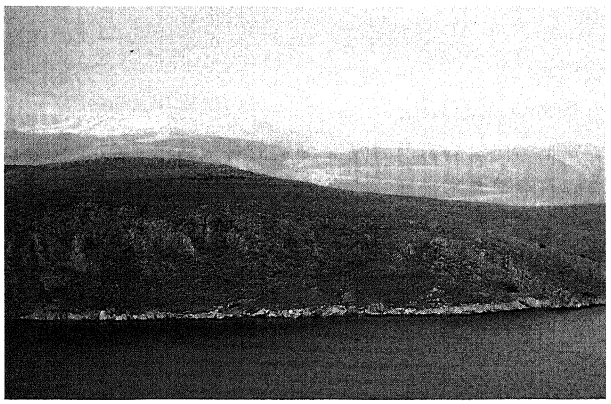


図１　コリント湾から雪を冠ったパルナッソス山を見る。

アテナイとピレウスの港が昔，5 km にもわたって長大な城壁に囲まれるようにつながっていた事実が示すように，海を足がかりとして，植民地を海の向こうに求めるなど，豊かな富をもたらす海とのつながりを約束する

＊ 工学部建築学科　教授

港との関係は何よりも重要であったろう。だがどうしてそんな高地に？　とも考えさせられる。無論，異民族はもとより同じギリシャ人でも他の都市国家をも信用しなかった，当時の人々の防衛上の意図はじゅうぶん考えられる。海とのつながりを持ちつつ，防衛上の点を考えると5-10 kmの距離は必要であったのであろう。アテナイにしてもオリムピアやコリント，エピダウロスにしても，そしてイタリアをはじめ地中海沿岸の地に建設した植民都市にしても，ギリシャの都市と海（港）との関係はほぼ共通している。これは神殿を建立し神々を祭る聖地としてのアクロポリスの丘と無論関連するが，海から攻めて来るやもしれない外敵を識別し得る海を眺望しうることと，その海からある一定の距離が重要だ。

〈神の具現としての偉大なる景観〉

だがなによりもこのデルフィの地の偉大さが，神々の存在を感じさせるような崇高な景観が人々をとらえた。古代ギリシャ人は偉大なる景観に神の具現を感じたというが，この大地に立って，人々は神々の身近にあることを感じた。そしてこの地を選択した。僕自身も感動した。心が洗われるような，静かな心の震えであったが，神々の存在にも共感を覚えた。それほどこの地の景観は偉大で，崇高だ。

デルフィはフォキス地方の最高峰パルナッソス（海抜2,457 m）の南麓の急な傾斜地にある。前8世紀に書かれた英雄叙事詩「オデュッセイア」中のあのオデュッセウスが少年の頃，叔父達と狩りに出かけ，巨大な野猪の牙によって足に大傷を負った(注1)のがこのパルナッソス山で，この物語だけからではないだろうが人々に親しまれた有名な山だが，裾野が広く堂々たる山容を見せ，古代から神々の棲む山と崇められ，山のあちこちには祭壇が設けられ，生け贄が捧げられていた。ミューズの美神達がこの山に棲み戯れていたというが，以来この山は芸術や学問と切り離せない関係となった。そしてこのパルナッソス山を背にデルフィは周囲を大きな円弧を描くように重なり連なる雄大な山々に囲まれている。

ギリシャの山々は鋭角状に険しく切り立つのではなく，ゆったりと大きな円弧を描く。樹木に覆われていないためか，稜線がくっきりと明瞭で，円弧状の輪郭を示しながら，それが幾重にも重なる。悠々として雄大な景観である。今日では樹木が少なく，岩肌が露出した山が多いギリシャだが，太古の昔は，山々は深い森林に覆われていた。だがソクラテスやプラトンの時代に既に，あちこちに禿げ山が眼に付いたという。森を切り倒し，その木材を利用して鉄や銅を精錬したり，陶器を焼いたり，また建物や船を建造した。樹木が根を張っていた土壌はその後の長い年月の間に，雨によって洗い流され，石灰岩の岩肌が露出してくる。気候の変化も無論もう一つの要因だろうが，その結果，神殿を建設する木材にも，人々の日々の暮らしに必要な薪にも不足するようになったという(注2)。以来禿げ山が増大した。これが山の稜線をくっきりと明瞭にし，山容を雄大にさせることとなったのは皮肉なことだ。

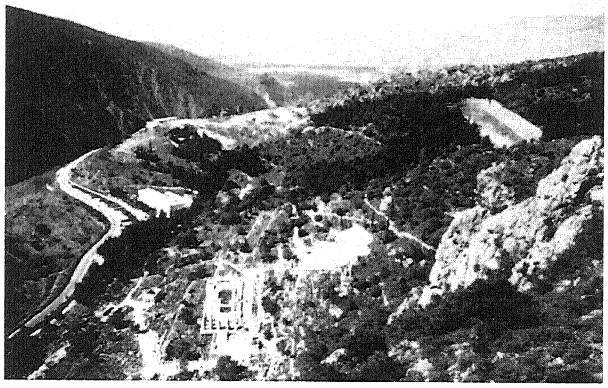


図2　「輝く岩」上から見た全体の神域。向こうにコリント湾の光る海が見える。

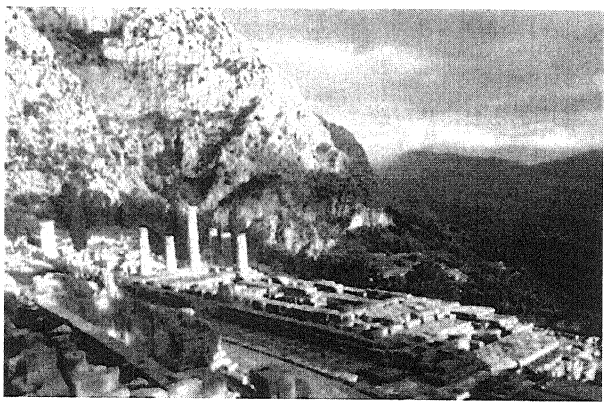


図3　雄大な山々に囲まれた神域。手前はアポロンの神殿。

パルナッソス山の南麓は300 m以上もの高さの絶壁になっているが，デルフィの地はこれを背に，コリント湾に注ぐプレイストス河が流れる渓谷を見おろす。周囲を神々が棲む雄大な山々に囲まれ，眼下にはギリシャには希と言ってもいいほどの豊かな銀緑色に輝くオリーブの樹海が広がる。その向こうにはコリント湾の光る海が眺望し得る―ここにはほかから隔離された固有な「ひとつの世界」が形成されている。そのスケールはそれほど大きくはない。『小さな世界』と言っていい。そしてこれは他のギリシャの都市にも共通する。

パルナッソス山を見上げると，透きとおる大気，天空までつらぬく青い空，そして透明な乾いた光と風の中，巨大な屏風のような絶壁を背にアポロンの神殿の列柱が屹立している(注3)。その形態はあくまでもくっきりと明

瞭だ。19世紀イギリスの画家ターナーはバイロンの詩集の挿し絵として「パルナッソス山とカスタリアの泉」と題するデルフィの絵を描いているが，ターナー独特のもやがかかったような，明確な輪郭がない風景画はデルフィには全く適さない。ターナーはギリシャにも，無論このデルフィの地をも踏んだことがないが，もしターナーがこの地へ旅をしてこの景観を描いたとしたら，果たしてどのような絵を描いたことだろう？

背後の絶壁はファイドリアデスすなわち「輝く岩」と呼ばれる崖だが，古代ギリシャにタイムスリップして，夕日を浴びて真っ赤に輝く屏風のような岸壁を背景にこれも夕陽を浴びて赤く染まった神殿が屹立し，その背後にある満員の野外劇場からは例えばアイスキュロスの悲劇を演ずるコロス（合唱隊）の歌声が雄大な山々に囲まれた渓谷全体に響きわたる様を思い描く。崇高な景観である。

古代のギリシャ人の都市と神殿を建立する地を選択するにあたって，偉大な自然の景観への執着が如何に大きなものであったか，そしてそれを見抜く並外れた眼力に驚嘆せざるを得ない。眼をとおして思考する民族であった。そして初期ギリシャの哲学者ヘラクレイトスは「人間は人間である限り，神の近くに住む」と言ったというが(注4)，古代ギリシャ人は神々の存在を感じる偉大な自然の景観が生への手がかりとなること―偉大なる景観が自分達の実存的意味に決定的な役割を果たすことを本能的に知っていたに違いない。だからこそ偉大なる景観に執着し，その中に抱かれるように，生きようとした。デルフィに限らず他のギリシャの都市それに例えば南イタリア，シチリアの植民都市などを見ると，そのどれも雄大な自然に抱かれた景勝の地である。デルフィはその中でも最も崇高であるといっていい。

〈アポロンの神託〉

デルフィは名高い「アポロンの神託」の地である。紀元前1600年以上もの昔に，この地の地割れの裂け目から霊気が生じ，それを吸うと神がかりのような状態になり，未来を予言する力（「神のお告げ」）を人は獲得したという。以来，大地の女神ガイアの予言の地として，人々の信仰を集め，後にゼウスの子オリュンポスのアポロンが神託の座に着き，神託を司ってきた。こうした神託の地はギリシャは無論のこと，イタリアなどの植民都市にもいくつかの場所にあって，それぞれ民衆の信仰をあつめてきたのだが，このデルフィの神託は例の英雄叙事詩「オデュッセイア」中に，ギリシャ軍の総大将アガメムノンが信託を伺うべく訪れたと出てくる(注5)など最も知られたもので，国の王から一般の人々に至るまで，何か重要な問題が生じて決断をするときには，ギリシャ国内は言うに及ばず遠く外国からこの地を目指して神託を伺いにきたという。

紀元前6-5世紀にはギリシャの都市国家は，ペルシャなどの外敵の問題もさることながら，人口増による土地と食糧難の打開と新たなる富の獲得を求めて，シチリアなど南イタリアをはじめとする地中海沿岸一帯に植民都市を開拓していったが，これらの植民都市の建設に際して，その場所の選択や都市の構成などについて，必ずデルフィにおもむいてその神託を伺い，そのとおり実行したという。だからデルフィは「植民都市の建設局」などと揶揄する人もいる(注6)。

それに紀元前5世紀のサラミス沖の海戦にあたってのデルフィの神託の御利益も有名である。当時の強国で版図を西方にも拡大すべく，ギリシャ征服をねらって大軍をたびたび送ってきたペルシャ帝国軍は，アテナイの外港ピレウスに近いサラミス島沖にてギリシャ連合軍と相対した。この海戦に際してギリシャ連合軍はデルフィに人を送って，神託を伺わせたという。こんな場合の神託とは，曖昧などっちとも解釈しうる神託であり，アテナイではその解釈に当たって議論は2つに分かれたと言うが，結局海戦のための船を増強せよという解釈を採って，これを実行し，海戦に勝利を収めた。以後ペルシャという外敵に怯えることが無くなり地中海の覇権を制し，ギリシャの都市国家とりわけアテナイは未曾有の繁栄を迎えたわけだが，こうした神託が当たったこともデルフィの名声を大いに高めたと言われる。

神のお告げである神託が当たれば，それをお伺いした当の本人は大いに感謝するのは当たり前のことで，決まった報酬のほかに，戦利品でつくった諸々の神の像とか，それを納めておく宝庫とか，小さな神殿とかいろいろな感謝の奉納品を納めた。デルフィの神域「テメノス」は多くはそれらの奉納品で構成されていた(注8)。

〈デルフィの凋落〉

だがデルフィの繁栄もこの時代までで，所詮は当たるも八卦，当たらぬも八卦，神託はあまり当たらぬの悪評が立ち始め，それ以降は衰退の途をたどった。ローマの属国になった頃まではそれなりの信望を集めていた時代もあったし，またそうでない時代もあった。いずれにせよ衰退の途をたどった。あの皇帝ネロがオリンピアと同様この地で4年に1度開催される大規模な音楽・劇・スポーツの競技会であるビューティア競技会に参加したまではよかったのだが，帰り際に神域を飾っていた500もの彫像群をローマに略奪していった例が物語るように破壊が始まった。これは紀元1世紀半ばのことだが，2世紀になるとやや息を吹き返した。アテナイの都市を整備・拡張するなどギリシャびいきで知られる皇帝ハドリアヌスがデルフィの地を2度にわたって訪れ，神域を修復・整備したり，あるいはあの「英雄伝」で名高いプルタルコスがその晩年をここデルフィの神官として過ごし

た事実（95-125）はそれを物語る。だがこれも一時のことであった。キリスト教がローマ帝国の国教と定められた4世紀頃からは，キリスト教と神託とは無論相い容れるわけがなく，迫害を受け，結局は人々から忘れ去られるに至った。（390年，皇帝テオドシウス，デルフィの神託を禁ずる。）

〈銀の渦を巻く神泉―カスタリアの泉〉

アポロンの神殿がその中央に立つ神域の東側にローマ時代のアゴラ跡，住居跡などがあり，更にその東には岩壁が裂けるように亀裂が入り，パルナッソス山の雪解けの水が地中深く滲み込み，幾層もの岩層を貫いて，湧き水となってここで地上に湧き出ている。「カスタリアの泉」である。前述したバイロンの詩集の挿し絵のためにターナーが描いた絵は，この辺りを何かの絵を参考にして描いたものであろう。アテナイやテーベ方面から陸路，デルフィを訪れる者はアラホーバの集落がある峠を越え，市内にはいると下方にあるトロス（円形）のアテナの神殿等がある神域や体育館を眺めつつ，この泉の脇を通ってアポロンの神殿がある神域を目指すのだが，必ずこのカスタリアの泉で沐浴をし，身を清め神域内に歩を進めたという。霊峰パルナッソスの賜物といえる神泉である。

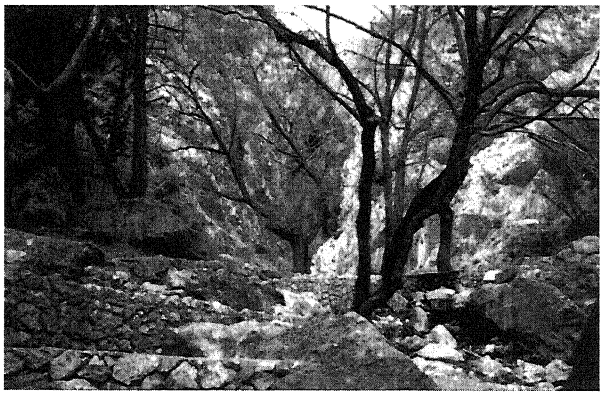


図4　カスタリアの泉への入口。

前5世紀のギリシャ劇作家エウリーピデス作の悲劇「イオーン」では「―（巫女達よ）銀の渦を巻く　カスタリアの泉におもむき　清らかな水に禊ぎした後　神殿に向かい賜え―」(注8)とあり，神託を告げる巫女もまたこの泉で禊をしたことも知られるが，その水は「渦を巻く」ように滾々と湧き，清らかであったようである。高い絶壁に深く鋭く亀裂が入っているような景観，そこに滾々とわく神泉―これも神の存在を身近に感じさせるような偉大なデルフィの景観を成り立たせる重要なエレメントである。

〈神域「テメノス」の構成―「光る壁」を背景に「聖なる道」と神殿の見え方〉

神域「テメノス」は300ｍもの高さの切り立った岩壁を背にした急勾配の南斜面地で，周囲を高い塀壁によって俗界と隔てられている。ほぼ矩形で，テメノスの入口は斜面の等高線に沿って走る幾筋かの小道と通ずるように数カ所あるが，主要入口門は東南の隅，ローマ時代のアゴラ跡を通っていく。この入口門（a点）からは，当時はおそらくアポロンの神殿は屋根と列注の一部ぐらいしか見えなかったのではあるまいか。入口門からアポロンの神殿とその前にある祭壇へと通ずる「聖なる道」があるが，入口門近くの沿道にはコルキュラ人の青銅製の牡牛像とか，アルカディア人の奉納物とかスパルタ人の奉納物とか，いろいろな奉納物とそれらを納める小建築物がところ狭しと並んでいたからである。

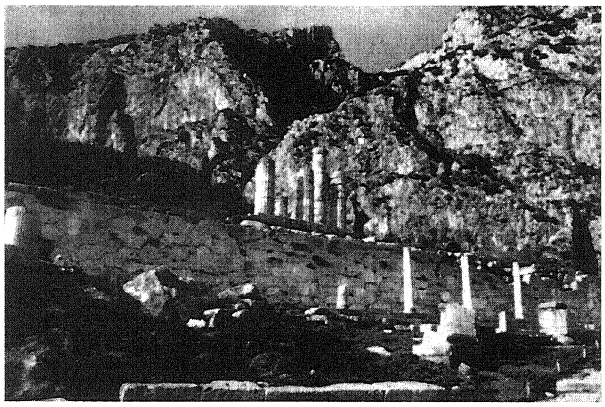


図5　屏風のような「輝く岩」を背景に峻立するアポロンの神殿。

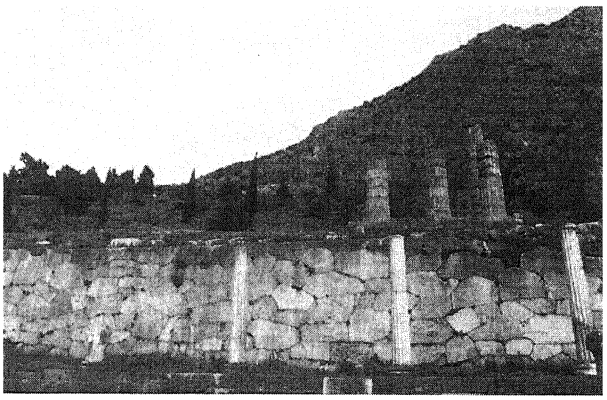


図6　「聖なる道」を昇るにつれ，神殿は岩山の稜線を破るように青空の中にシルエットを映しはじめる。（C点）

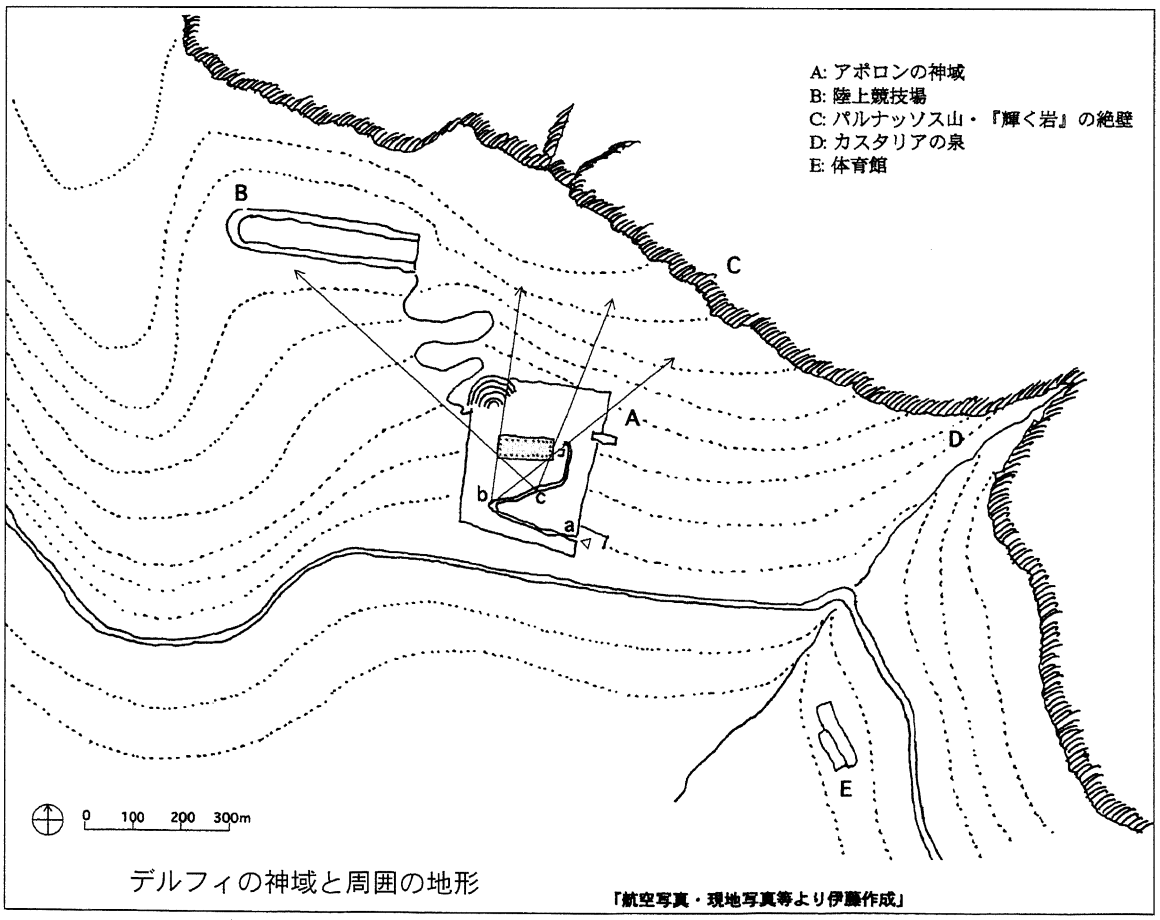
さて沢山の立像や奉納物とそれらを納める宝庫，小建築物が両側に立ち並ぶ緩やかな傾斜の「聖なる道」を進むと道は突然右に折れ，やや急な坂道となる。この道が

折れ曲がった地点（b点）で視界は拓け，奉納庫，宝庫越しに上方，基壇上にアポロンの神殿が仰ぎ見える。「輝く岩」と呼ばれる絶壁を背景に基壇上に神殿が屹立する壮大な景観だ。神々しいと言ってもいい。神殿がたつ高い基壇と光る岩壁を屏風のように背景としたことが神々しさのより大きな効果をもたらしている―透明な大気，青い空にあって，神聖な宇宙に溶け込むかのように，ひとは「聖なる道」から仰ぎ見るからである。―このb点の場の設定と神殿の向きがいい。長手方向の北側ファサードだけでなく，西側ファサードも見えるため，神殿の全体像が捉えられ，それが見る者を圧倒するからである。「光る壁」の屏風を背景に神殿の列柱の奏でる音楽が透明な大気の中を響きわたるようだ。ヴァレリーの詩的な建築の捉え方が思い起こされ，共感する(注9)。

神に参拝する祭礼の日の朝，日が昇り始める頃，折り返し地点でその壮大なる景観を一瞥し，方向を変えた祭列は神殿を斜め上方に見ながら，東側正面ファサード前に祭られた祭壇へとやや急な「聖なる道」を前方の高く切り立った岩壁に向かって厳かに進む。神域全体を包み込むように突き出た東側の岩壁によって朝日は遮られているから，前方の岩壁は未だ黒い壁だが，斜め上方の神殿は初めはこの黒い屏風のような背景の枠内にすっぽりおさまっている。だが北側ファサードのほぼ中間，昔，巫女シュビレが神託を歌ったという「シュビレの岩」あたり（c点）に来ると岩山の稜線を破るように，未だ明けきらない青空の中に神殿はそのシルエットを映し始める。

神殿の列柱のリズムに呼応しつつゆっくりと進む祭礼の列は，「聖なる道」を登りきったところで祭壇の前に到達する。やや時間が経って祭壇での供犠の儀式の準備が整う頃，神殿に朝日が射しはじめる。その光をいっぱいに浴びて光り輝きだす神殿の東正面ファサードに祭礼の参加者は感嘆する。そして視線を左に移せば眼下にひろがるオリーブの樹海の向こうに，光る海が眺められる―神々しいばかりの光景である。デルフィの神域の設定やアポロンの神殿の建立位置などの選定において，古代ギリシャ人が構想したことは，こうした自然景観との融合であったのではあるまいか。

霊気を吹く大地の裂け目の上部に神殿最奥部のアデュトン（神の声が告げられる場，至聖所）が設けられたという古代の伝承を信じて，たとえ神殿建立の位置は予め



デルフィの神域と周囲の地形

「航空写真・現地写真等より伊藤作成」

決められたものとしても，その位置は絶妙というほかない。そしてその位置は霊気が吹き出した場所として偶然の結果のものだとすると，これは奇跡のようなもので，背後に神の存在すら感じさせる。

だとしても例えば垂直に切り立つ「輝く岩」を屏風に見立て，水平に柱が並び立つ神殿の背景とするなど，この景観中での（たとえ所与のものだとしても）神殿の位置関係が有する意味を見抜き，これと関連して実に綿密な思考のもとに「聖なる道」の設定をはじめとする神域全体の構成を構想したのは古代ギリシャ人だ。

〈密度の高い空間であったに違いない至聖所「アデュトン」〉

例えば東方のバビロンでは水が何よりも人の心を捉えたのに対し，古代ギリシャ人は何よりも大地を崇めたというが(注10)，これは大地が裂けた暗闇が支配する深部への畏怖となってあらわれる。デルフィの神托は実りをもたらす（あらゆる生を産み出す）豊穣なる大地の女神ガイアと深く関連する。ではどこで神の声が告げられたかというと，神殿最奥の一段降りた場所，至聖所「アデュトン」である。

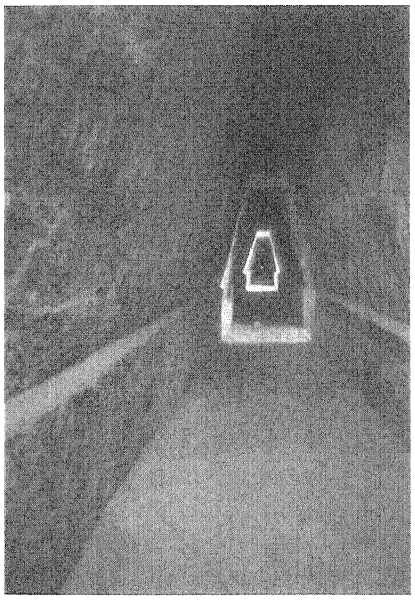


図7　南イタリア，クマにある女予言者シュビラの洞窟。神話を告げる場は最奥にある。

その下の岩盤の裂け目からは霊気が吹き出し，これを吸った巫女が神がかりの状態となって，神の声をさけび，傍らにはべる神官はこれを6脚の詩に直して伺いにきた者に伝えたのだという。巫女は3本の高脚に支えられた鼎トリプスの上に座り，傍らには浄めの象徴としての月桂樹と神の衣である編み目の布でくるまれた世界の臍，すなわちこの場が世界の中心であることを象徴する大理石のオンファロスがあったという。

毎月7日，ギリシャ国内はもとより，遠く海を渡って伺いにきた外国人を含めた多くの人達がここで神託を聞いた。人の幸せの，そして不幸の出発点であったのだと言えよう。だがこの至聖所のありようは未だわかっていない。発掘調査によってもその痕跡は何にも出なかったという。無論当時の人々も至聖所内には足を踏み入れることは許されなかったわけで，2世紀にギリシャ中を旅して，その案内記のようなものを書いたパウサニアスはデルフィの地を訪れ，神殿の内部に入り，ポセイドンの祭壇が築かれているなどと記しているが，それ以上奥に入れなかったようで，「神殿の一番内部まで通るのはわずかな人々で―」と記し，パウサニウス自身にも窺い知れなかった(注11)。だがその空間と関連して思い出すのは，イタリア，ナポリ（この地も古代ギリシャ人の植民都市ネアポリスであった）に近いクマというこれも古代ギリシャ人による植民都市があり，ここで近年発見，発掘された女予言者シュビラの印象的な洞窟である。

岩山に高さ3m程だろうか，底辺が2m程の巾の台形の洞窟空間が長さ100mにわたってくり抜かれている。切れ味鋭い刃でくり抜いたような，鋭い形態をした長大な空間である。その鋭さは，あのアテナイのパルテノン神殿の列柱のフルーチング，すなわち溝を形成するエッジの鋭さと同じように文化の総体をうかがわせる知的な印象を与える。そして最奥の部屋には巫女が座り，「神の声」がこの洞窟のような空間をとおして，打ち震えるような声が伝えられたという。この洞窟の空間は何mかおきに脇から採光し得るように穴があいているのだが，それがなんともリズミカルに洞窟中を暗闇と光の空間に演出している。デルフィの神託の場も，形の相違こそあれこのように密度の高い空間であったに違いない。

〈雄大な自然に融合する劇空間〉

さてアポロンの神殿と中途半端に重ならないようにその位置を周到に考えられた野外劇場(注12)だが，（斜面の一番上にある陸上競技場(注13)もそうだが）他のギリシャの野外劇場と同様に，斜面である自然の地形を巧みに利用している。古代ローマ人の卓抜した土木技術を駆使して自然の地形に大々的に手を加える方法とは違い，自然に寄り添うような姿勢からか，自然との馴染みが不思議とよい。建設行為とはいずれにせよ自然の破壊から逃れられないのだが，古代ギリシャ人のとりわけ野外劇場の建設においては，自然の地形との馴染みの良さは絶妙だ。雄大な自然景観に融合した劇空間だ。この劇場の規模は，高い塀壁に囲まれた矩形の神域が比較的小さいことから，そう大きくはない。が，座席に座って前方に展開する神々しく崇高ともいえる雄大な景観は息をのむようだ。その神々しく崇高ともいえる，雄大な景観につい

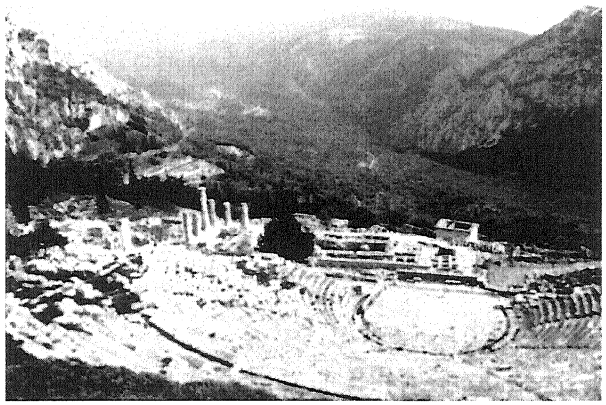


図8　オリーブの樹海と雄大な山々の向こうに海も見える野外円形劇場

てはすでに述べたので繰り返さない。ゲーテはシチリア島への旅において，タオルミナの古代ギリシャの野外劇場跡を訪れた際，「これほどの景色を眼前に眺めた者はほかにあるものではない（1787年5月6日，日曜日）」と野外劇場の最上席に腰を下ろして眺めた景観の素晴らしさに感嘆したが(注14)，これとてデルフィのこの景観には遠く及ぶものではあるまい。

夕日が沈む頃，この劇場でギリシャ悲劇が演ぜられ，アポロンの神殿を中心とするデルフィの神域全体に，静寂を破ってトロスの合唱が美しく響きわたる。それに呼応するように神殿の列柱が奏でる音楽も静かに渓谷全体に響きわたる。そして交響する。ギリシャ人の生活の中心にあったのは造形美術ではなく，音楽であった，政治も神殿もすべてが音楽に支配されていた(注15)が，この神域を包み，神の気配に溶解させるのはまさにこの音楽であったかもしれない。

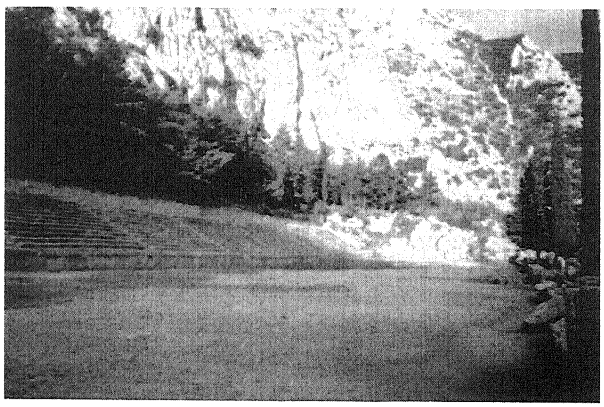


図9　神域外，上部にある陸上競技場と観客席

アリストテレスは弟子達と共に度々，このデルフィの地を訪れ，思索に耽ったというが，思索の地としてこれ以上の地はあるまい――。

参　考　文　献

注1：ホメロス「オデュッセイア（第19歌）」松平千秋訳，1999，岩波文庫.

注2：これに関してはいろいろな証言，資料がある。例えば最近の報告で，包括的に地中海地域における森林破壊を扱ったものに　安田喜憲「地中海文明の興亡と森林破壊」（講座文明と環境，第9巻　森と文明所収）1996，朝倉書店.

注3：今日見るアポロン神殿は紀元前530年建立され，373年大地震によって崩壊した後，再建された（紀元前33年完成）ものの遺構で，完全ではないが6本立つ円柱は倒れ散乱していたものを1941年に復元したもの。中山典夫，村川堅太郎「デルフォイの神域」1981，講談社.

注4：M. ハイデッガー「ヒューマニズムについて」1947，ヘラクライトスの断片119のハイデッガー訳，（角田幸彦「景観哲学への歩み」2001，文化書房博文社からの再引用）

注5：ホメロス　前掲書，（第8歌）

注6：エゴン・フリーデル「Kulturgeschichte des Griechenland（古代ギリシャ文化史）P 86」1981，Deutscher Taschenbuch Verlag

注7：個人及び共同体に限らず収益，利益，戦利品等の1/10を神に献じ，神に感謝するのが古代の人々の習わしであった。

注8：エウリーピデス「イオーン（95-98行）」松平千秋訳，〈ギリシャ悲劇全集7〉1996，岩波書店.

注9：ポール・ヴァレリイ「エウパリノスまたは建築家」（建物が歌う―P 35，列柱の奏する歌を聞く―P 50），伊吹武彦訳，1954，人文書院.

注10：広川洋一他「ギリシャ思想の生誕」，1979，河出書房新社.

注11：パウサニアス「ギリシャ記」（第10巻，第3章神殿内部と泉），飯尾都人訳，1991，竜渓社.

注12：C. ドクシアデス「古代ギリシャのサイトプランニング」長島他訳，1977，鹿島出版会.
ドクシアデスは古代ギリシャの神域の配置構成について興味深い分析をしているが，デルフィの神域についての主張は「2つの最も大きい建物のマッス，アポロンの神殿と野外劇場の視覚的な衝突は避けられている。主入口及び南東入口のいずれから見ても野外劇場は神殿の陰になり，全く見えなかった（P 47）」とするのみである.

注13：古代ギリシャの4大祭典（運動競技，音楽，劇等が競われた）のひとつ「ビューティア祭」が催された場所.

注14：J. W. ゲーテ「イタリア紀行」（中巻，P 154），相良守峰訳，1942，岩波文庫.

注15：エゴン・フリーデル　前掲書.